

プロローグ～余生の値段は六〇〇〇万円～

「平野様とのご契約は一四年です」。男の唐突な言葉に、私は耳を疑った。

「え、それは一四年経^たったら、このホームから追い出されるというわけですか？」

「いえ、そういうことではございません」

にこやかに顔の前で手を振り、スーツ姿の男は続けた。

「現在、平野様は七七歳でいらっしゃいますから、一四年経つと九〇歳になられます。

我々のシニアレジデンスでは、支払い方法は二種類ございまして、月払方式と前払方式がございまして。平野様は前払方式をご希望ですので、入居時に一時金、すなわち一生分のお家賃をお支払いいただくことになります。

そこで『私の一生っていつまでなの？』という話になりますが、平均年齢などを考慮しまして、九〇～九二歳ぐらいまでとさせていただきます。平野様の場合は七七歳で

すので、九〇歳までの一四年分が『一生分のお家賃』ということになります」

ずっと私は八〇歳で死ぬと決めていた。年老いた自分の姿が想像できなかった。大学時代は学生運動に明け暮れ、社会人となり自分の事業が軌道に乗った後も、「激動の世界を見てやろう」と世界放浪の旅に出た。世間では「定年」とされている六〇代後半以降も、世の中の常識と闘い続けた。長生きする気はなかったから、若い頃にかけた民間の年金も八〇歳までの契約だ。七七歳の私の余生は本来ならば三年だ。

そんな私の思いなどつゆ知らず、男はテーブルに紙を広げた。マンションの個室番号が振られたマス目に、びっしりと数字が並んでいる。

「平野様のご希望は、こちらのオーシャンビュウの六三・九四平米のお部屋になりますから、月あたりのお家賃が三五万九〇〇〇円、それにかけることの一四年、つまり一六八ヶ月分ですね。三五万九〇〇〇円かける一六八ですから……合計で六〇三一万二〇〇〇円となります」

男は電卓で検算をして、テーブルに広げた「入居一時金一覧表」を再度指さした。

「この六〇三一万円をはじめにお支払いいただければ、一生分のお家賃をいただいたこと

になります。ですから入居から一四年を過ぎて、九五歳、一〇〇歳、一一〇歳までお住まいいただけます、追加のお家賃はいただきません。そのほかに月額利用料をお支払いいただきますが、この料金には共益費や基本サービス料金、食事基本料が含まれておりまして、合計で月々約一九万円となります」

一四年の契約が終了したら追い出される、それは私の誤解だった。超高級といってもここは老人ホームなのだから、当たり前前の話ではある。「一生分の家賃」と月々の利用料さえ払えば、いつまでもいられるのだ。

「九〇歳を過ぎますと、おそらく介護が必要になってきます。その時は介護居室に移っていただきますが、我々の施設では介護保険の特定契約を結ぶことができますので、毎月定額でお食事やおトイレ、入浴の介助など、生活全般のお世話をさせていただきます。

平野様は前払方式ですので心配ご無用ですが、月払方式ですと介護の費用に加えて、九〇歳を過ぎても毎月のお家賃を払い続けることになります。これが前払方式でしたら、仮に長生きしてもその心配はないということで、他の入居者様もほとんどが前払いで契約をされております」

最初に払う六〇〇〇万円。決して安くはないが、退職金がある。人生最後の大きな買い物、全財産を使い果たして死ぬつもりだからいい。

でも待てよ、そのほかに毎月一九万円の月額利用料、さらに自炊や外食などにかかる食費、酒代、水道光熱費や買い物などで月一〇万円、合計で月々約三〇万円は使うことになる。

八〇歳で死ぬはずの私であるが、考えてもみなかった九〇代の話をされたことで不安になってきた。担当の話では、今の時代、日本人男性の四人に一人は九〇歳まで生きるといふ。もし私が八〇歳で死ぬなかったら、あとどれだけの資金が必要になるのか。男は私がこのまま契約するものと思っている。「なかなかお金がかかるね。ちよつとつらいな」と私。

「仮に償却期間の前に亡くなられたり、途中で退去なさる場合でしたら、一時入居金から初期償却費用と残りの月数のお家賃を引いて、差額を返却させていただきます。

七七歳でしたら初期償却費用は入居金の一七%となりますので、約一〇二五万円。まずこちらをはじめに引かせていただきます。それから残りのざっと五〇〇〇万ぐらいですか、

本来でしたらこれを九〇歳までの一四年間かけて償却することになりますが、もしこれから七年後にご逝去された場合は、五〇〇〇万円の半分の二五〇〇万円を身元引受人の方にお返しします。また『やはり家族と住むことにしたので退去します』といった場合にも、七年間でしたら同じく二五〇〇万円を居住者様にお返しします」

海が脳裏をよぎった。

ここは千葉県鴨川市。南房総地域の人口三万弱の田舎町。太平洋に突き出した房総半島の海には、視界を遮る障害物がない。見渡す限りの水平線なのだ。先ほど内見した一八階の部屋からも、果てしない海が広がっていた。かがやく波光、寄せては返す白い波。青空に澄みわたる鳥の声。

人生最後の日々は、海の見えるところで暮らしたい。ずっと私はそう願ってきたではないか。

「まだビルの内部は工事中のようだけど、ここにはいつから入居できるんですか？」

「二〇二一年一月から入居開始です。我々のシニアレジデンスは、これから始まるのです。作るのは居住者の皆様です。平野様はライブハウス『ロフト』グループの創始者とう

かがっております。楽しいイベントなどのアイデアもお持ちでしょう。是非ともご入居をご検討いただければと思います」

よし決めた！ 住み慣れた東京を離れよう。これからの私は、海に見える超高級老人ホームで暮らすのだ。思い残すことは何もない。

それまでの数年間、頭の中を覆っていた将来への不安と憂鬱が、すーっと晴れていくのがわかった。

目次

プロローグ／余生の値段は六〇〇〇万円／

3

第一章 「やすらぎの郷」を求めて

13

コロナ禍で会長を辞任する／ライブハウスに訪れた存続の危機／
ロフトが遠くなっていく／妻の住む家に帰る／妻が別れてくれない／
友達の多くが死んでいく／「やすらぎの郷」を求めて／
老人ホームの現実を知る／三井不動産が老人ホームを建てる／
そして鴨川にやってきた／海に見える部屋に住みたい

第二章 ここは天国か？

40

新しい人生が始まる／引越しの日が決まる／この施設にはなんでもある／

第三章

海と孤独と自由と

鴨川の町を一周する／海に叫ぶ／平野さんの老人ホームを見学したい／
何階に住んでいらっしゃいますか？／ここは間違いなく天国だ／
ホームの支配人に交渉する／孤立無援の唄／誰もいない老人ホームのバーで／
興奮して眠れなかった夜／ロックへの落胆から生まれたもの／
追憶のロフトプラスワン／配信までのカウントダウン／ネット配信が始まる／
鴨川の夜は更けて／配信終了五分前／年末年始が訪れる前に

忘年会で下北沢へ／四谷の安い居酒屋で／そして新年を迎える／
歳を食っても素敵な奴ら／冷たい海風が吹く町で／
「ワタミのデリバリー」で一四年過ごした老人／
六本木の自宅を売り払った長老／地元の漁師にマグロをもらう／
タイで二万人を雇っていた男／春よ来い／終の住処を求めていたはずなのに／
ある大物政治家からの電話／老人ホームで老々介護／
人生のクライマックスを七〇代に／今日は生きるに値しただろうか／

第四章

そして、ホームを出る

このホームはどこまでも自由だ／二〇二二年二月の終わりに／
これではらくはやっていける／第二回ネット配信のゲストが決まる／
鴨川に森達也がやってきた／桜咲く生まれ故郷へ／念願の大山千枚田へ／
宮崎学が亡くなった／金持ち、喧嘩せず／ゴールデンウィークの来訪者／
予定外のネット配信／私はプチブルだったのか／
ホームのご婦人から声をかけられる／妻に出ていかれた老人／
トンビと仲良くなりたい

テニスがしたかっただけなのに／もうあんたはやめなさい／
タカラジェンヌがやってくる？／空からの友を待つ／大金持ちのジョーク／
Biboが踊る花のワルツ／平野よ、俺は映画を撮る／国葬の日に上映するぞ／
鴨川で待っていた友達／文藝春秋のムックに掲載される／海で亡くなった老人／
メダカの飼育に挑戦！／教会の鐘が鳴る／「ヤフーニュース見ましたよ」／
鈴木邦男が力尽きた／チクったのはあんただろ！／ここがどこだかわからない／

いちご狩りには行かない／東京の日々が増えていく／

二〇二三年四月の日記より／元氣な平野悠に今のうちに会っておく会／

二〇二三年五月の日記より／二〇二三年六月の日記より／

値上げありきの説明会／そのサングラス、一〇〇円シヨップ？／

そして七九歳になる／長老がホームを出ていく／

二〇二三年一〇月九日の日記より／メリークリスマス

エピローグ

JASRAC 出 26038501601

図版レイアウト／MOTHER